

明治後期と昭和前期に用いられた師範学校と旧制中学校の 地理科教科書の内容比較

近藤 裕 幸

I はじめに	(4) 教授法が掲載されている教科書
II 師範学校と中学校教科書発行の概要	IV 昭和初期の地理科教科書の比較
(1) 教科書発行の始まり	(1) 昭和初期の「日本地理」教科書
(2) 教科書発行数	(2) 昭和初期の「外国地理」教科書
(3) 教科書頁数	(3) 昭和初期の「地理学通論」教科書
III 明治後期の地理科教科書の比較	V 師範学校と中学校の教科書記述が変化した背景
(1) 明治後期の「日本地理」教科書	VI おわりに
(2) 明治後期の「外国地理」教科書	
(3) 明治後期の「地理学通論」教科書	

キーワード：教科書，教授法，師範学校，旧制中学校，戦前期

I はじめに

筆者は、先に第二次世界大戦前（以下 戦前期）の師範学校および旧制中学校（以下 中学校）の地理科の制度について比較考察し、両者の地理教授制度はほぼ同時期に実施され、ほぼ同内容であることを明らかにした¹⁾。しかしながら、本来異なる目的をもって設置されている学校の制度がほぼ同じに見えたとしても、実際に使用する教科書などには差異がみられる可能性があるため、教科書レベルでその教授内容を究明する必要がある。

そこで、本研究の目的は、地理教授制度史研究の枠をこえて、師範学校地理科教科書の具体的な教授内容を中学校のそれと比較することでその量的および質的な特徴を明らかにすることにある。具体的には、量的な差は頁数を、質的な差は教科書の記述内容を表し、この二つの側面から教科書を捉えることによって、両者の特徴を明確にしようとするものである。

考えられることは、当時中学校は中等教育の中心的存在であったことから、中学校の教科書の内容は師範学校のものよりも量的に多く、質的にもより高度なのではないかという点である。さらに、質的側面をやや詳細にみると、師範学校の生徒は将来訓導となることがほぼ確定していることから教科書には知識のみではなく、教授法についての記述があることも想定できる。これらの量的質的相違を追究することは、これまで地理教授史において明らかにされてこなかった師範学校における地理教授史の側面を明らかにすることはもちろんであるが、さらに発展させて中学校・高等女学校・実業学校といった学校種と比較考察することによって、中等教育における地理教授の全容を解明することへとつながると言えよう。

ただ、すべての地理科教科書を取り上げることは紙幅の都合上困難であるため、取り上げる時期を明治40年頃と昭和10年頃とし、同一著者が師範学校と中学校の両教科書を3年以内に執筆したも

第1表 中学校と師範学校の地理科教科書発行冊数（初版のみ；1897～1945年）

Table 1. Number of geography textbook of middle school and normal school (First edition limited; 1897-1945)

	中学校	師範学校
日本地理	129冊	23冊
外国地理	238冊	43冊
地理学通論	73冊	23冊

（筆者実見により作成）

のみに限定した。これによって教科書執筆者がそれぞれの教科書に対してどのような意図を持っていたのかを明確に捉えることができよう。

比較時期としてまず明治後期を取り上げた理由は、「師範学校教授要目」が制定されるなど、中学校や師範学校において、教授内容が詳細に規定され、この後の地理教授が大筋で踏襲していくことになる教授内容の基本スタイルが確立された時期であったためである。次に昭和前期は、師範学校においては教授内容がほとんど変更されず教授内容が安定していた時期だったためである。それぞれの時期は教授内容の基本スタイルが確立した時期と、教授内容が安定していた時期であることから比較検討において好適であると考えた。また、同一著者が3年以内に執筆した教科書に限定することにした理由は、師範学校と中学校の教科書の内容に相違がみられれば、そこに執筆者のそれぞれの教育に対する考えを導出することが可能と考えたからである。その期間を3年とした理由は、教科書は毎年版を重ねることで微修正はみられることがあるものの、その内容を規定する教授要目等の法令は3年という短期で改訂されることはなく、著者の執筆意図が大きく変わることが少ないためである。

なお、本研究においては教科書の内容分析することになるが、これは筆者が国立教育政策研究所教育図書館において実見により複写入手したものをを用いた。また、教科書の文章については原典のまま引用することを原則とし、文字変換の技術上

困難な場合は新仮名遣い及び漢字を用いた。

II 師範学校と中学校教科書発行の概要

（1）教科書発行の始まり 中学校用地理科の教科書は、K・ジョンストンの地理書を底本に1897年に富士谷孝雄が著した『中等教育如氏地理科教科書』や、前橋孝義『訂正万国地理』等の刊行に始まる。一方、師範学校用と銘打った地理科教科書は中学校用よりやや遅れて1902年の田沼書店編輯部『講習用外国小地理』や1904年の地理教授研究会『師範学校新地理教科書 本邦之部』、1904年の地理教授研究会『師範学校 新地理教科書 本邦之部』、1905年の山上萬次郎『最近統合帝国地理 師範学校用』等が見られる。

ただ実際のところ、当時の中学校、高等女学校、師範学校で用いられる地理科教科書は兼用されたことが多かったと推察される。1901年初版の三省堂編纂所『帝国新地理』の例言によると、「本書は、中学校・師範学校・高等女学校及これと同等の諸学校に於ける日本地理の教科用に充てんために編纂したるものなり」とあるからである。

その後、1905年頃からしだいに「中学校用」、「師範学校用」と表紙に明示され、かつ師範学校用、中学校用といった形で例言等にて執筆の意図を明確にした教科書が刊行されるようになっていく。

（2）教科書発行数 明治初期から昭和前期における地理科の教科書は、日本地理・外国地理・地理学通論⁴⁾の3つに分かれていた。日本地理は日本地誌、外国地理は外国地誌、地理学通論は系統地理が主たる内容であった。

師範学校と中学校の地理科教科書の発行数⁵⁾をみると、中学校の地理科教科書のほうが師範学校のそれよりも数が多い。これは師範学校の生徒がもっとも多かった1945年頃でも男女合計で約5万5000人であるのに対して、同時期の中学校生徒数は約90万人⁶⁾であったことを考えると、中学校の教科書発行数の多さは当然のこととみられる。

第2表 日本地理・外国地理・地理学通論の教科書
Table 2. List of Japan geography, foreign geography, systematic geography textbooks

日本地理教科書 師範学校用					日本地理教科書 中学校用					
執筆者	教科書名	出版社	出版年	頁 整理 番号	執筆者	教科書名	出版社	出版年	頁	
地理教授研究会	師範学校新地理教科書 本邦之部	吉川弘文館	1904年 3版	164	1	地理教授研究会	中等新地理教科書 本邦之部	吉川弘文館	1903年 訂正再版	194
山上萬次郎	最近統合帝国地理 師範学校用	大日本図書	1905年	206	2	山上萬次郎	最近統合帝国地理 中学校用	大日本図書	1905年	177
宝文館編輯所	師範教育最新地理	宝文館	1910年	199	3	宝文館編輯所	最新内外一統地理 中学校用 日本之部	宝文館	1908年	136
三省堂編輯所	師範教科 最近地理学 日本地誌	三省堂	1909年	138	4	三省堂編輯所	中等教科 最近日本地理	三省堂	1911年	163
六盟館編輯所	師範教科 明治地理 日本之部	六盟館	1910年	138	5	六盟館編輯所	中等教科 明治地理 日本之部	六盟館	1912年 訂正再版	198
六盟館編輯所	師範教科 新式日本地理	六盟館	1913年	233	6	六盟館編輯所	新式日本地理 中学校用	六盟館	1913年	233
山上萬次郎	新式帝国地理 師範学校用	大日本図書	1918年	288	7	山上萬次郎	新式帝国地理 中学校用	大日本図書	1918年	164
小林房太郎	新地理 日本 師範用	文学社	1923年 7版	165	8	小林房太郎	提要新地理 日本	文学社	1921年	103
小川琢治	師範教科 改訂中等地理学 日本之部	富山房	1924年 再版	190	9	小川琢治	中等地理学 日本之部	富山房	1921年	183
三省堂編輯所	師範教科 新制最近 日本地理	三省堂	1932年 再版	207	10	三省堂編輯所	新制最近日本地理 乙表準拠	三省堂	1932年 修正3版	207
石橋五郎	師範地理教本 日本之部	富山房	1932年	207	11	石橋五郎	新制第一版 新体中等地理 日本之部 甲表準拠	富山房	1932年	207
田中啓爾	師範 日本地理	目黒書店	1932年	224	12	田中啓爾	新中等日本地理 中学校用甲表準拠	目黒書店	1933年 訂正再版	224
守屋荒英雄	新選地理 帝国之部	帝国書院	1933年 再版	186	13	守屋荒英雄	新選地理 帝国之部 甲表用	帝国書院	1933年 訂正版	186
守屋荒英雄	新令準拠 新選地理 日本篇 師範学校用	帝国書院	1937年	276	14	守屋荒英雄	新令準拠 新選地理 日本篇 中学校用	帝国書院	1937年	286
石橋五郎	日本現勢地理	富山房	1937年	264	15	石橋五郎	現勢日本地理	富山房	1937年	264

外国地理教科書 師範学校用					外国地理教科書 中学校用					
執筆者	教科書名	出版社	出版年	頁 整理 番号	執筆者	教科書名	出版社	出版年	頁	
地理教授研究会	師範学校 新地理教科書 外国之部	吉川弘文館	1904年 3版	114	16	地理教授研究会	中等新地理教科書 外国之部 上中下	吉川弘文館	1903年	320
山上萬次郎	最近統合外国地理 師範学校用上下	大日本図書	1905年	311	17	山上萬次郎	最近統合外国地理 中学校用 上中下	大日本図書	1905年	409
宝文館編輯所	師範教育最新地理	宝文館	1910年	307	18	宝文館編輯所	最新内外一統地理 中学校用外国之部 上中下	宝文館	1908年	299
三省堂編輯所	師範教科 最近地理学 外国地誌	三省堂	1909年	205	19	三省堂編輯所	中等教科 最近世界地理 上中下	三省堂	1911年	284
六盟館編輯所	講習科用明治地理外国	六盟館	1909年	94	20	六盟館編輯所	中等教科 明治地理 外国之部 上中下	六盟館	1912年	233
地理研究会	新地理 外国之部 師範学校	文学社	1913年	184	21	地理研究会	新地理 中学校用 外国之部 上中下	文学社	1913年	295
山上萬次郎	新式世界地理 師範学校用	大日本図書	1919年 再版	288	22	山上萬次郎	新式世界地理 中学校用 上中下	大日本図書	1918年	347
地理教授同志会	世界地理 師範学校用	帝国書院	1920年 訂正版	224	23	地理教授同志会	世界地理	帝国書院	1921年 改訂版	284
小川琢治	師範教科 改訂中等地理学 外国之部	富山房	1925年 再版	193	24	小川琢治	中等地理学 地図挿入 外国之部 上中下	富山房	1925年 改訂再版	477
石橋五郎	師範地理教本 外国之部	富山房	1932年	227	25	石橋五郎	新制外国地理 乙表準拠	富山房	1933年 訂正再版	227
三省堂編輯所	師範教科 新制最近世界地理	三省堂	1932年	200	26	三省堂編輯所	新制最近世界地理 乙表準拠	三省堂	1932年	200
地理教授同志会	新制世界地理	帝国書院	1932年	199	27	地理教授同志会	新制世界地理 甲表用 8年版	帝国書院	1932年	199
守屋荒英雄	新選地理 世界之部 師範学校用	帝国書院	1934年	222	28	守屋荒英雄	綜合新選地理 世界之部	帝国書院	1935年	194
西田興四郎	改訂新編外国地理 師範学校用	駿々堂	1940年	209	29	西田興四郎	新編外国地理	駿々堂	1937年	266
守屋荒英雄	新選地理 外国篇 師範学校用	帝国書院	1937年	218	30	守屋荒英雄	新令準拠新選地理 外国篇中学校用	帝国書院	1937年	218
田中啓爾	師範 新外国地理	目黒書店	1937年	236	31	田中啓爾	中等新外国地理 改訂版	目黒書店	1938年	250

地理学通論教科書 師範学校用					地理学通論教科書 中学校用					
執筆者	教科書名	出版社	出版年	頁 整理 番号	執筆者	教科書名	出版社	出版年	頁	
三省堂編輯所	師範教科 最近地理学 地文及人文	三省堂	1909年	88	32	三省堂編輯所	中等教科 最近地理学	三省堂	1910年	70
六盟館編輯所	師範教科明治地理 地文人文之部	六盟館	1910年	146	33	六盟館編輯所	新体地文学全	六盟館	1909年	86
山上萬次郎	最近統合地理概説 師範学校用	大日本図書	1911年	120	34	山上萬次郎	最近統合地理学概説	大日本図書	1911年	114
地理研究会	新地理 師範学校 概説之部	文学社	1913年	95	35	地理研究会	新地理	文学社	1913年	95
三省堂編輯所	師範教科 最近地理通論	三省堂	1915年 修正再版	110	36	三省堂編輯所	中等教育新地理通論	三省堂	1914年 再版	92
小林房太郎	新地理 概説 師範用	文学社	1915年	140	37	小林房太郎	新地理概説	文学社	1915年	140
地理教授同志会	地理概説 師範学校用	帝国書院	1920年 訂正版	114	38	地理教授同志会	地理概説	帝国書院	1920年 訂正版	114
守屋荒英雄	新選地理 概説之部 師範学校用	帝国書院	1934年	120	39	守屋荒英雄	新選地理 地理通論	帝国書院	1933年 再版	111
田中啓爾	師範 新地理概説	目黒書店	1937年	145	40	田中啓爾	中等 新地理概説	目黒書店	1937年	145

注) 頁数に網目がかけられたものは、師範学校用と中学校用教科書で頁数が多いほうを表し、両教科書についている場合は同じ頁数であることを示す。

(筆者実見により作成)

(3)教科書頁数 本研究では2～3年の間に同じ執筆者が書いた地理科教科書をとりあげ、その頁数を比較することでそれぞれの教科書の特徴を明確にしていくが、上記の条件にあった教科書の一覧が第2表である。

その条件にあった教科書の数は、日本地理で15点、外国地理で16点⁷⁾、地理学通論で9点であった。中には版を重ね数年にわたって刊行された教科書もあったが、ここでは初版のみを取り上げた。

まず、この比較からわかることは、師範学校用教科書と中学校用教科書の頁数差は次第になくなっていき、後年には師範学校用、中学校用という書名であるにもかかわらず全く同じ内容の教科書もみられるようになることである。

具体的には、日本地理の教科書では当初は師範学校の地理科教科書の頁数が多いときもあれば、中学校のものが多くときもあったが、1930年頃を境にしてほぼ同じ頁数になっていく傾向が見られる。外国地理の教科書では当初は中学校のほうが師範学校より頁数が多くなっているものの、しだいに師範学校、中学校がほぼ同じ頁数になっていく。地理学通論の教科書では師範学校教科書の頁数が多くなる傾向にある。

また、先述したように、教科書のタイトルが異なっても内容がまったく同じ場合もあった。たとえば、日本地理教科書の1932年以後の教科書(整理番号10, 11, 12, 13, 15)は師範学校と中学校の教科書はほぼ同じ内容である。外国地理で言えば、整理番号26, 27, 30は内容が同じである。地理学通論では、整理番号35, 37, 38, 40は全く同じ内容となっている。

第2表から、中学校が学校制度で教育制度の中心的存在であるからといって、常に師範学校よりも中学校の地理科教科書の頁数が多いとはいえないことがわかる。

では、次章より上記の差異について、具体的内容の違いを検討する。

III 明治後期の地理科教科書の比較

(1)明治後期の「日本地理」教科書

a. 三省堂編輯所『師範教科 最近地理学 日本地誌』(1909年)と三省堂編輯所『中等教科最近日本地理』(1911年)の比較

両書それぞれ明らかに師範学校用と中学校用とを区別して執筆されたことが例言からわかる。具体的には、師範学校用では「本書は師範学校の教科用書たらしむる目的を以て、編纂したるものにして教材の選択及び排列は明治42年2月に公布せられたる、師範学校教授要目取調報告に則りたりと雖、当事者の意見を参酌し、多少刪修したる所あり⁸⁾」とあり、中学校用では「本書は中等学校教科書とする為に、…〔中略〕…地理教授の旨を達成することに努めた⁹⁾」とあるからである。それぞれの目次は第3表のとおりであり、中学校のものが師範学校のものより25頁多く、取り上げる順番に若干の相違がみられる。

この二つの教科書の25頁の差を生み出した要因を探るために、一例として「中国地方の自然」の

第3表 三省堂編輯所の日本地理教科書の目次
(数字は頁数)

Table 3. Contents of Japan geography textbook of Sanseido Edit, Inc. (A number shows the number of pages)

『師範教科 最近地理学 日本地誌』(1909年)	『中等教科 最近日本地理』(1911年)
通論	大日本帝国 1
地理総説 1	地方誌
地球の表面 9	関東 4
地球上の住民 20	奥羽 19
日本地理	中部 29
総説 24	近畿 45
関東 31	中国 59
奥羽 45	四国 69
中部 54	九州 77
近畿 70	台湾 91
中国 83	北海道 100
四国 91	樺太南部 109
九州 98	朝鮮 113
台湾 112	総説
北海道 120	地勢 124
樺太南部 133 (~138)	近海 131
	気候及び天産物 133
	産業及び物産 137
	住民 148
	政治 151
	教化 155
	交通 159 (~163)

(筆者実見により作成)

記述内容を以下に示す。

【師範学校用】 地域，半島状をなし，中国山脈此を縦貫し，白山火山脈，亦之と併走するを以て，河流は南北に分る。即ち吉井川（東大川）・旭川（西大川）・高梁川・太田川等は山陽を流れ，江川・斐伊川・日野川等は，山陰を流る。山陰は平地少く，海岸も亦単調にして，著しきは，島根半島のみなれども，山陽面は，之に反して平野廣く，海岸は出入島嶼甚だ多し，其有様によりて，沿海を水島灘・備後灘・広島湾・周防灘等に分れり。此地は，山陽道の美作・備前・備中・備後・安芸・周防・長門と，山陰道の因幡・伯耆・出雲・石見・隠岐との十二國にして，之を政治上，岡山・広島・山口・島根・鳥取の五縣に分つ。〔以下各県の地誌が¹⁰⁾づく〕

【中学校用】 本州の西部に当れる半島状の地域にして，政治上五縣に分たる。

「地勢」 中国山脈東西に連れども，著しく削磨せられて，廣き山地をなし，之と並べる白山火山脈には，大山・三瓶山等の名山あり。大山は，中国第一の高峰にして，山容の美に著はる。河流は多く南北に分流し，その河谷は，陰陽の交通に便すること多し。南斜面の吉井川・旭川・高梁川等は，その下流に岡山平野を開き，大田川・岩国川等も，多少の平野を伴へり。北斜面の江川は，中国第一の大河なれども，その沿岸には平野乏しく，斐伊川・日野川等の流域は，宍道湖・中海の沿岸地方と共に，山陰に於ける重要な生産地をなせり。

「海岸」 海岸は，南北趣を異にし，山陰面は，島根半島附近の外，概ね単調なりと雖，山陽面は屈曲複雑にして，沿岸には長汀曲浦相交り，海上には大小無数の島嶼ありて，風景宛も絵の如く，海上の公園と称せらる。こ

の海面は，地形の状態によりて，水島灘・備後灘・安芸灘・広島湾・周防灘に分れ，西端は九州に迫りて，下関海峡を成す。

「気候」 山陰地方は，山陽に比して，温度稍低く，又冬季は，對馬暖流の影響を受けて，降雪頗る多けれども，山陽地方は，表裏に山脈を控へ，湿風を受くること少きが故に，割合に晴天多く，本邦における雨量の最も少き¹¹⁾地方に属し，その海岸には保養の適地多し。

師範学校用は内容が非常に簡素で，地名が羅列されているのに対し，中学校用の方は情報量が豊富になっているとみられる。

b. 六盟館編輯所『師範教科 明治地理 日本之部』（1910年）と六盟館編輯所『中等教科 明治地理 日本之部』（1909年）の比較

これらの教科書も先の三省堂のものと同様に，師範学校用，中学校用と明確な意図をもって書かれたものである。¹²⁾

この六盟館編輯所『師範教科 明治地理 日本之部』の特色は，教育に関わる法令が掲載されていることにある。師範学校の教授方針ともいべき「師範学校規程」などが掲載され¹³⁾，いずれ小学校の訓導となり小学校でいかなることを教えるのかを師範学校の生徒に学ばせようとする意図がみられる。師範学校用の地理科教科書が地理の知識のみを伝えるのではなく，教授法についても教えるべきという六盟館編輯所の考えが表れているといつてよい。

師範学校規程 第13条

地理八級の形状運動並に地球表面及人類生活の状態を理解せしめ我が国及び諸外国の国勢を知らしめ且小学校に於ける地理教授の方法を会得せしむるを以て要旨とす。地理は世界地理の概略及び日本地理並に我が国と重要な関係ある諸外国の地理の概要を知らしめ又地文の一斑及人文地理の概略を授け且教授法

第4表 三省堂編輯所の外国地理教科書の比較
（数字は頁数）

Table 4. Comparison of foreign geography textbook of Sanseido Edit, Inc. (A number shows the number of pages)

『師範教科 最近地理学 外国地誌』（1909年）	『中等教科 最近世界地理 上中下』（1911年）
ユーラシア洲 1 （韓・清・ロシヤ・スエーデン・ドイツ・イギリス・インド・印度支那など） 大洋洲 120 アフリカ洲 134 北アメリカ洲 154 南アメリカ洲 186 海洋誌 200（～205）	〔上巻〕 総論 1 清洲地理 3 世界地理 亜細亞州 17（～80） 〔中巻〕 欧羅巴洲 1（～92） 〔下巻〕 阿弗利加洲 1 北亞米利加洲 27 南亞米利加洲 69 大洋洲 95 兩極地方 110（～112）

（筆者実見により作成）

（注）「海洋誌」には、太平洋・インド洋・大西洋・北極方面・南極方面について書かれている。

を授くべし。

小学校令施行規則第6条

地理は地球の表面及人類生活の状態に関する知識の一般を得しめ又本邦国勢の大要を理解せしめ兼て愛国心の養成に資するを以て要旨とす。

地理は本邦の地勢気候区画都会産物交通等並に地球の形状運動等の大要を理會せしめ又学校の修業年限に応じ各大洲の地勢気候区画交通等の概略より進みて本邦との関係に於て重要な諸国の都会産物等を知らしめ且本邦の政治経済上の状態並に外国に対する地位等の大要を授くべし。

地理を授くるには成るべく実地の観察に基づき又地球儀地図標本写真等を示して確實なる知識を得しめ特に歴史及理科の教授事項と連絡せしめんことを要す。

この師範学校用教科書は138頁で、中学校用は198頁であり、60頁の差がみられる。こうした差がうまれた要因は、記述内容が中学校の方が詳細であることが要因である。

その他の違いとして、知識の定着をはかるために中学校用教科書には、設問や補足説明がもうけ

られている。例えば、中学校『中等教科明治地理 日本之部』の「奥羽地方概括」において、「(1)関東地方の概括を準用すべし。(2)関東・奥羽両地方を共通する山脈・火山脈・鉄道？(3)面積は関東の約二倍なれども、人口は約二分の一にして、密度、関東地方の四分の一に止まる」などといった設問がみられる。

一方、師範学校用でも「教授参考」が設けられている。例えば、福島県の最後には「福島県教授参考」があり「本県は本邦第二位の大県なり。東部と中部との交通を妨ぐるもの？中部・西部は岩越鉄道の敷設なき以前に於ても比較的¹⁴⁾に交通便なりし理を地形上より考察せよ？」など¹⁵⁾とあり、これは中学校と同様に知識の定着を図るために設けられている。

しかしながら、将来の教授時の参考として、「是れ暗誦的に陥るを防ぎ、又概括・比較・結合に便ならしめんと欲してなり¹⁷⁾」という注意書きがみられる。暗誦的にならないように注意を喚起するなど、将来訓導となったときに気をつけるべきことが併記されているのは、まさに師範学校用教科書ならではの¹⁶⁾特徴である。

(2)明治後期の「外国地理」教科書

a. 三省堂編輯所『師範教科最近地理学 外国地誌』（1909年）と三省堂編輯所『中等教科 最近世界地理 上中下』（1911年）の比較

上記の師範学校用と中学校用の外国地理教科書の目次は第4表の通りである。

この師範学校用教科書のヨーロッパ州には総論がない。具体的には、中学校用教科書では「境域欧羅巴洲は、亜細亞州の西に連れる、半島状の地域にして、三面海に臨む。面積僅に約六十四萬方里、亜細亞洲の四分の一にも足らずと雖、半島・島等の肢節多きを以て、面積の割合に海岸線の長さことは、諸大陸中の第一に位せり¹⁸⁾」と水系・気候・生物・産業・交通にわたり総論的な説明がある。一方、師範学校用の教科書には総論記述がみられず、各国の地誌がいきなり始まる。これによ

り総頁数に差がでたものと思われる。

b. 六盟館編輯所『講習科用 明治地理 外国』(1909年)と六盟館編輯所『中等教科 明治地理 外国之部 上中下』(1912年)の比較

両教科書の具体的な記述内容(「亜細亞洲」)を比較すると中学校用教科書の記述内容が詳細になっている。

【師範学校用】気候・天産 北部は厳寒にして、雨量少なく蘚苔・灌木の外植物稀にして、魚類・毛皮獸に富めり。南部は、極熱にして、雨量多く、獅子・虎・象・水牛棲み、竹・椰子樹・芭蕉茂れり。中部は、寒暑の差多く、雨量少なくして、一大砂漠帯相互れり。されど、東南部の我が国などは、¹⁹⁾気候温和にして、雨量多く、牛・馬等の家畜あり。

【中学校用】気候 大部、温帯にあれども、面積廣き上に、大山脈あるが故に、南東なる沿海地方の外は、概ね大陸の気候にして、中にも、北東部に、世界屈指の最寒地、南西部に、世界屈指の最熱地あり。南東部と南部とは、雨量多きも、其の他は之に反し、中部の高原地方の如きは、無雨帯相互れり」

天産物 気候多々あれば、生物の種類極めて多し。北部には蘚苔の外、植物を見ざるも、馴鹿・犬の家畜あり。鯨・膾豚獸・獵虎・極熊・黒貂あり。中部には、松・樺・山毛櫨よく成長し、牛・馬・羊・駱駝あり。南部には、椰子樹・竹・チークを繁茂し、米・綿花・甘蔗・桑・香料・護摩を栽培すべく、²⁰⁾猛獸・毒蛇多き所あり。

(3) 明治後期の「地理学通論」教科書

a. 三省堂編輯所『師範教科 最近地理学 地文及人文』(1909年)と三省堂編輯所『中等教科最近地理学』(1910年)の比較

両教科書の目次は第5表のとおりである。「地球の形成」の項を比較すると以下ようになる。

第5表 三省堂編輯所の地理学通論教科書の目次 (数字は頁数)

Table 5. Contents of systematic geography textbook of Sanseido Edit, Inc. (A number shows the number of pages)

【師範教科 最近地理学 地文及人文】(1909年)	【中等教科 最近地理学】(1910年)
地文一斑	星界 1
地球の形成 1	陸界 18
地殻地熱 4	陸地の状態 18
陸地の變動 5	陸地の變動 18
海と陸地との関係 29	地形の種別 37
岩石の大別 30	地殻の構造 42
地形の成因 34	水界 47
地形気候生物相互の関係 39	気界 54
(人文地理概説)	生物界 65
自然と人類との関係 42	結論 68
人類の社会的生活 46	(~70)
産業及貿易 57	
交通 61	
国力及文化 64	
小学校における地理教授法 70 (~88)	

(筆者実見により作成)

【師範学校】「地球の形成」

天空に輝く数多の星の中にて、太陽を中心とし、其周囲を回れる一群を太陽系といふ。太陽系は、水星・金星・地球・火星・木星・土星・天王星・海王星の八大遊星と、四百六十余の小遊星、若干の彗星、無数の隕星及び二十一の衛星等よりなる」

「星雲説」地球の形成に関し、学者の推考する所によれば、遼遠の昔、宇宙間に酷熱の瓦斯塊あり、現に存在する星雲の如く、絶えず回転しつつありしが、遠心力の為に軸線に扁平なる楕円体となり、其度益々加はりたる結果、外縁は終に離れて数條の輪環を生じ、各輪環は再び集合して、数多の小塊となりたるものにして、中央の大塊は即ち太陽となり、周囲の小塊は遊星となり、之と同じ方法により、遊星の周囲に衛星と生じたりと、之を星雲説といふ。此説の如くんば、地球は他の天体と同じ物質より成り、且内部は外部よりも、²¹⁾割合に久しく熱を保持すべきは明なり。

【中学校用】「地球の形成」

「宇宙」仰いで天空を望めは、広漠として

第6表 六盟館編輯所編輯所の地理学通論教科書の目次 (数字は頁数)

Table 6. Contents of systematic geography textbook of Rokumeikan Edit, Inc. (A number shows the number of pages)

『師範教科明治地理 地文及人文之部』(1910年)	『新体地文学 全』 (1909年)
(第二学年用)	星界篇 1
星界篇 1	陸地篇 16
陸地篇 12	海洋篇 53
海洋篇 42	空気篇 64
空気篇 52	生物篇 83
生物篇 65 (~68)	結論 85 (~86)
(第三学年用)	
人文地理	
自然と人類との関係 1	
住民と其の状態 5	
産業と重要産物の分布 19	
交通 29	
国家 32	
世界主要諸国の国力比較 40	
結論 46 (~48)	
小学校地理教授法 49 (~74)	

(筆者実見により作成)

際涯なく、只日月の高く懸り、星辰の多く輝くを見るのみ、此空間を宇宙といふ。宇宙間の星は、散乱極りなきが如く見ゆと雖、数多の星団相集りたるものにして、各団の中には三種の星あり。一星団の中心となり、位置の殆ど変ずることなきものを恒星といひ、恒星の周囲を、絶えず運行するものを遊星といひ、遊星の周囲を運行しつつ、恒星を回転するを衛星といふ。

「太陽系」太陽は恒星の一にして、之に属する一群の星を総称して太陽系といふ、即ち太陽の外、水星・金星・地球・火星・木星・土星・天王星・海王星の八大遊星、四百六十余の小遊星、若干の彗星、無数の隕星、二十一個の衛星より成る。

「星雲説」地球の形成に関し、学者の推考する所によれば、遼遠の昔、宇宙間に酷熱の瓦斯塊あり、現に存在する星雲の如く、絶えず回転しつつありしが、遠心力の為に軸線に扁平なる楕円体となり、其度益々加はりたる結果、外縁は終に離れて数條の輪環を生じ、各輪環は再び集合して、数多の小塊となりたるものにして、中央の大塊は即ち太陽となり、

周囲の小塊は遊星となり、之と同じ方法により、遊星の周囲に衛星と生じたりと、之を星雲説といふ。此説の如くんば、地球は他の天体と同じ物質より成り、且内部は外部よりも、割合に久しく熱を保持すべきは明なり。²²⁾

多少中学校用のほうが師範学校用の教科書よりも難解な語が用いられている印象をうけるが、内容に差はあまりみられない。師範学校用の全体頁数が多い理由は、中学校教科書は自然地理の内容のみであるのに対して、師範学校用教科書には「人文地理概説」や「小学校における地理教授法」の頁が追加されていることによる。

b. 六盟館編輯所『師範教科明治地理 地文及人文之部』(1910年)と六盟館編輯所『新体地文学』(1909年)

この師範学校用教科書には、先述した六盟館編輯所の『師範教科 明治地理 日本之部』(1909年)と同様に、師範学校規程の第13条と小学校令施行規則第6条が掲載されており、本書が師範学校用教科書であることがはっきりと意識されている。

地理学通論教科書では、師範学校は全116頁、中学校は全86頁である。この六盟館の両教科書(「地形」)を比較すると以下のとおりである。

【師範学校用】第1章 地形 垂直的地形 陸地は、坦々たる水面と異なり、凸凹参差極りなし。之を大別して、高地・低地の二となす。高地に、高原あり山地あり。其の山地に、孤峰あり、山彙あり、山系あり。又低地には窪地あり、平原あり。其の平原に、沿海平原・河谷平原・盆地などあり。²⁴⁾

【中学校用】第1章 地相 垂直的地形 陸地は、坦々たる水面と異なり、凸凹参差極りなし。之を大別して、高地・低地の二となす。高地に、高原あり山地あり。其の山地に、孤峰あり、山彙あり、山系あり。又低地には窪

地あり、平原あり。其の平原に、沿海平原・河谷平原・盆地などあり。²⁵⁾

ここまでは師範学校用教科書とほぼ同じだが、この後、中学校用教科書では以下のように続く。

山地と人文 ヒマラヤ山脈が、蒙古・高加索を劃ぎり、アルプの山つづきが、歐洲に於ける、南北両民族の接触を、久しく阻碍したるが如く、山地は実に、人種・文明・交通などを限界すべき、自然の障壁なり。山地は、垂直的に気候を異にし、従って生物(特に植物)の種類を多からしめ、又水蒸気を冷縮して、潤雨を降し、以て河源を養ふべき作用をなし、岩石・鉱物も亦、山地に出づるもの多し。概言するに、山地の民は、偏狭なれども、剛健着実に、憎悪嫉妬の念深さも、独立愛国の心強く、素朴遲鈍なれども、堅忍不拔にして、勤勉力行なり。是れ豈に山地の感化なしとせんや。²⁶⁾

中学校用教科書では、山地と人々の感性とが関連づけて述べられている。各項目では中学校用の頁数が多くなっているが、全体としては師範学校用教科書が多くなっている。つまり、中学校用教科書には人文地理の部分がないため、これだけの頁数の差となっている。記述内容は中学校のものの方が羅列的記述ではなく、地人現象を関連づけたものとなっている。

(4) 教授法が掲載されている教科書

師範学校用教科書の中には教育法令や教授法について言及されていたものがみられた。こうした傾向がみられる教科書には、先に取り上げた六盟館編輯所の教科書を含めて、以下の三冊が挙げられる。

西田與四郎 / 山崎直方 関 『講習用書 地理篇』宝文館 1907 (明治40) 年

三省堂編輯所 『師範教科 最近地理学 地文及人文』三省堂 1909 (明治42) 年

六盟館編輯所 『師範教科明治地理 地文人

第7表 石橋五郎日本地理教科書の目次 (数字は頁数)

Table 7. Contents of Japan geography textbooks by Goro Ishibashi (A number shows the number of pages)

『日本現勢地理』 〔師範学校用〕 (1937年)	『現勢日本地理』 〔中学校用〕 (1937年)
序説 1	序説 1
地方誌	地方誌
樺太 9	樺太 9
北海道 18	北海道 18
奥羽 31	奥羽 31
関東 48	関東 48
中部 69	中部 69
近畿 99	近畿 99
中国 122	中国 122
四国 137	四国 137
九州 147	九州 147
台湾 171	台湾 171
朝鮮 184	朝鮮 184
関東州 199	関東州 199
南洋群島 203	南洋群島 203
第3編総括 206	第3編総括 206
第4編結論 259 (~264)	第4編結論 259 (~264)

(筆者実見により作成)

文之部』六盟館 1910 (明治43) 年

例えば、西田の教科書では以下のように地理科の目的について書かれている。

地理科は天体としての地球、地球表面ノ自然の状態並に其上に於ける人類生活の状況、土地と住民との関係についての一斑知識を得しめ、又我国の位置・地勢・気候等の自然上の状態並に都邑・産業・交通等の生活上の状況及政治上・経済上等に於ける現勢より我国と関係深き諸外国の自然上及人事上の状況、並に我が国の世界に於ける地位等の大要を理会せしむるものなり。²⁷⁾

その他、法令や目的のみではなく、ラインの五段階教授法が教授には有効であること、他には歴史と地理を関連させて学ぶことで興味を喚起すること等についてもこれらの教科書には書かれており、明らかに将来訓導になる者のために書かれているといえる。

これまでみてきたように、明治時代後期の地理科教科書についての師範学校および中学校教科書の全体的な傾向は、師範学校のものよりも中学校のほうが詳細に記述されていることがわかる。ま

た、わずかではあるが、師範学校用教科書に教授法についての記載がみられるものがあつた。これは単に知識のみを教えるのではなく、知識と教授法を関連させようとする執筆者たちの考えが表れているといつてよい。

では、1937年前後ではこうした特徴がどのように変化したのであろうか。

IV 昭和初期の地理科教科書の比較

本章では、昭和初期の師範学校と中学校の地理科教科書の内容の差異を比較する。前章同様に、同一執筆者がほぼ同年に著した中学校用と師範学校用の地理科教科書を比較することで、それらの教科書の相違を明らかにしたい。

(1) 昭和初期の「日本地理」教科書

a. 石橋五郎『日本現勢地理』（1937年〔師範学校用〕）と石橋五郎『現勢日本地理』（1937年〔中学校用〕）

目次を比較するとまったく同じであり、記述内容についても違いはみられない。それぞれの地方に割り当てられた頁数についても、その配分は全く同じである。記述内容もまったく違いがない。

b. 守屋荒美雄『新令準拠 新選地理 日本篇 師範学校用』（1937年）と守屋荒美雄『新令準拠新選地理 日本篇 中学校用』（1937年）

この師範学校用と中学校用教科書の頁数はともに276頁であり、内容は全く同じである。ただ、中学校用には師範学校用とは異なり、付録として「地理用語の解釈」の項がみられる。具体的には「隘路 山と山とに挟まれた一条の通路」からはじまり、「涸河 Wadi 沙漠地方に於て降雨時自由に流れる一時的の河で、平時は全く河水を欠き空谷のみを残すものをいふ」²⁹⁾などの用語集で、500個程度の用語が10頁にわたって付属しており、その点のみ違いがみられる。

(2) 昭和初期の「外国地理」教科書

a. 田中啓爾『師範新外国地理』（1937年）と田中啓爾『中等新外国地理 改訂版』（1938年）の比較

これらの教科書の目次は第8表の通りである。

この田中の教科書は、両教科書の内容排列が異なっている。例えば、この田中の中学校用教科書では例言に「各大陸の説述の順序は、我が国の延長である東亜より始め、その外縁をなすアジア及びオセアニアを述べ、次にヨーロッパとその外縁をなすアフリカに及び、最後に北米とその外縁をなす南米に終ることとした。かく世界を地理的三大ブロックに分ちて述べ、大西洋・太平洋を附加して結んだ³⁰⁾」とあり、教える際に易から難へ進む排列ではなく、これは師範学校用教科書とは対照的である。

「アジアの位置・区分」についての記述内容は以下の通りであり、中学校用のほうが詳しい。

【師範学校用】アジアは北半球にあつて、旧大陸の東半を占め、西半のヨーロッパと共にユーラシア大陸と呼ばれる。／政治的には数多の国家及植民地に分れているが、位置的関係によつて分つと東部アジア・南部アジア・北部アジア・西部アジア・中央アジアの五区³¹⁾となる。

【中学校用】アジアは北半球にあつて、旧大陸の東半を占め、西半のヨーロッパと共にユーラシア大陸と呼ばれ、我が国と最も関係の深い大陸である。面積は約四四〇〇萬平方料

第8表 田中啓爾の外国地理教科書の目次（数字は頁数）

Table 8. Contents of foreign geography textbooks by Keiji Tanaka (A number shows the number of pages)

『師範 新外国地理』 (1937年)	『中等 新外国地理 改訂版』(1938年)
おせあにや 1	アジア 1
両極 15	オセアニア 115
アフリカ 17	ヨーロッパ 128
南アメリカ 30	アフリカ 194
北アメリカ 46	北アメリカ 205
アジア 85	南アメリカ 231
ヨーロッパ 159 (～236)	両極 243
	大西洋と太平洋 245(～250)

(筆者実見により作成)

で、六大洲中最大で世界陸地の三分の一を強を占める。政治的には数多の国家及植民地に分れているが、位置的關係によつて分つと東部アジア・南部アジア・北部アジア・西部アジア・中央アジアの五区となる。³²⁾

師範学校用に比べて中学校用のほうが、具体的な数値が挙げられ詳細になっている。ヨーロッパの位置区分においても、その傾向はみられる。

【師範学校用】ヨーロッパはユーラシア大陸の一大半島で、面積は大ではないが世界文化地帯の核心地域であるから独立した大陸と認められる。然し凡ての現象はアジアと密接な関係がある。本洲には有力な国家が多いが、位置的關係によつて大別すると、東部ヨーロッパ・北部ヨーロッパ・中央ヨーロッパ・西部ヨーロッパ・南部ヨーロッパの五区となる。³³⁾

【中学校用】ヨーロッパはユーラシア大陸の一大半島で、面積は約一〇〇〇万方軒で、アジアの略四分の一に過ぎないが、人口は約五億で世界全人口の約四分の一を有し、且つ世界文化地帯の核心地域であるから独立した大陸と認められる。然し凡ての現象はアジアと密接な関係がある。本洲には有力な国家が多いが、位置的關係によつて大別すると、東部ヨーロッパ・北部ヨーロッパ・中央ヨーロッパ・西部ヨーロッパ・南部ヨーロッパの五区となる。³⁴⁾

この記述の後、中学校用教科書では、ヨーロッパの自然総説が述べられる。「北部にはスカンジナビア半島からイギリス諸島につづく古い削磨された北部高地があり、中部にはそれよりも新しい同じく準平原化され、且つ断層によつて無数の地塊に分けられた独・仏に亘る中山性の中央高地があり、南部には最も新しい大褶曲で且つ高峻な南

第9表 守屋荒美雄の地理学通論教科書の目次
(数字は頁数)

Table 9. Contents of systematic geography textbooks by Susabio Moriya (A number shows the number of pages)

『新選地理 概説之部 師範学校用』(1934年)	『新選地理 地理通論』(1933年)
緒論 1	陸海 1
産業 4	水界 31
人類 20	気界 39
政治 45	生物界 55
陸界 53	星界 58
水界 82	産業 77
気界 92	住民 90
生物の分布 106	政治 106
星界 111	(~111)
結論 128 (~130)	

(筆者実見により作成)

部山地がある〔以下略³⁵⁾〕と、4頁にわたって説明があり、その後で東ヨーロッパの説明が始まる。このように説明が詳細な分、14頁の差がみられることになった。この時期の外国地理教科書では師範学校用と中学校用の差が少なくなる傾向がある中でその例外といえよう。

b. 守屋荒美雄『新選地理 外国篇 師範学校用』(1937年)と守屋荒美雄『新令準拠 新選地理 外国篇 中学校用』(1937年)の比較

この両教科書は全く同じものである。例言では「国民思想の作興」「日本精神の涵養」などが強調されている。例言に以下のようにある。「地理学は吾人の居住する世界についての实际的知識を与へるのみならず、また国家思想・国民精神の作興に資すべき重大なる使命を有する。而して今や世界を挙げて、政治的に、将た又民族的に、前古未曾有の難局に際会しつつある。この時に当り著者は、我が国内外の情勢と地理教育の現状とに鑑み、更に著者の有する地理学と地理教育との信念に基づき、地理教授革新の要あるを痛感して、昨年、従来の教科書に一大改修を断行した³⁶⁾」とあり、当時の時代状況を反映している。

(3) 昭和初期の「地理学通論」教科書

a. 守屋荒美雄『新選地理 概説之部 師範学校用』(1934年)と守屋荒美雄『新選地理 地理通論』(1933年)

ここでは師範学校用のほうが教科書の頁数が中学校よりも多い。同一箇所の記述内容を比較すると以下のようなになる。

【師範学校用】「陸地の分布」 地表は、陸と海とに分れ、其の面積は、陸一・〇海二・七の割合である。大きな陸塊は旧大陸・新大陸・オーストラリアで、旧大陸は、地文上・人文上、アジア・アフリカ・ヨーロッパに、新大陸は、パナマ地峡によつて、南・北アメリカに分れ、ここに陸地は、六大陸（六大洲）に分けられる。

「陸半球・水半球」 陸は北半球、海は南半球に多く、英吉利海峡とニュージーランド附近とを両極として、地球を二等分すれば、陸地の大部を含む陸半球と、主に海洋より成る水半球とに分れる。

「陸地の肢節」 大陸の一部が分岐して海中に突出した水平的肢節と、陸地の高度の変化による垂直的肢節との二種がある。水平的肢節は、その形状によつて半島・岬角と呼ばれ、又水面によりて、大陸より分離したものを島と云ふ。

島には、日本列島・英吉利諸島のやうに、陥没又は浸食によつて、大陸より分離した陸島と、火山島・珊瑚島・遺跡島のやうに大陸と無関係な洋島がある。

垂直的肢節は、其の形状と高度とによつて、平野・盆地・台地・高原・山嶽・丘陵に分けられる。

設問

- (一) 何によつて、大陸と島嶼とを区別するか。
- (二) イギリス諸島が、陸島である証拠を³⁷⁾示せ。

一方、中学校用の『新選地理 地理通論』では、以下のような記述になっている。

【中学校用】「水陸の分布」 地球の表面、陸と海とに分れ、その面積は陸一、海二・七の割合である。陸地は北半球に、海洋は南半球に多い。

今、英吉利海峡と新西蘭とを両極として、地表を二等分すれば、陸地の大部を含む陸半球と、主として海洋より成る水半球となる。「大陸と肢節」 大なる陸地を大陸といひ、大陸の一部が分岐して、洋の中に突出してゐるものは、その形状によつて半島・岬角などと呼ばれる。又大陸と離れて、海中に浮かんでゐるものを島といふ。³⁸⁾

この守屋の教科書においては、師範学校用のほうが丁寧かつ高度な内容になっている。

明治後期では中学校用の教科書のほうが師範学校用のものよりも頁数が多く、内容も詳細である傾向が見られた。しかし、昭和初期の日本地理・外国地理・地理学通論の地理科教科書においては、師範学校と中学校の地理科教科書の内容はほぼ同一なものまたは逆のものがみられることがわかった。

なお、昭和初期の師範学校用の地理科教科書において、教授法が掲載されたものはみられない。教授法が教科書に掲載されたのは、明治末期のみの特徴といえる。

V 師範学校と中学校の教科書記述が変化した背景

では、昭和前期に師範学校用の地理科教科書が中学校のそれと同内容になり、中学校教科書の優位性がほぼみられなくなったのはなぜであろうか。この教科書の優位性の喪失は、時の政府が師範学校を中学校よりも上位の存在として位置づけようとしたことと関係しているのであろう。

学制以来、師範学校は経済的には恵まれないが勉強を続けたいと思った者が進学することが多かった学校で、一般に中学校よりは一段低くみられ

ていた。³⁹⁾しかしながら、1943年師範教育令中改正によって師範学校はすべて官立に移管され、同時に修業年限3年程度の専門学校と同格の存在と位置づけられるようになる。いうまでもないが、当時の専門学校は今日の大学の前身であることから、師範学校が専門学校と同格になるという事実は師範学校が中等教育段階に位置する中学校よりも上に位置づけられたことを意味する。

この改正の背景には、師範学校を官立に移管することによる地方財政の負担軽減、また教育のあり方にも国家が深く関わる必要性があったのではないかと、横畑は教育学史の視点から指摘している。⁴⁰⁾公教育を担う師範学校の充実が国家形成の上で欠かせない要素であったのである。

実は、師範学校の位置づけについての改革はすでに1931年の師範学校規程改正にも見られていた。それについて田中は「(1)高等教育の充実に伴う師範学校地位低下への対策、(2)新教育思潮による新しい教師像への期待、(3)西欧型の教育および教員養成制度の改善、(4)経済変動に伴う地方財政の困窮、(5)小学校教師の質的向上への期待」があったのではないかと見ている。⁴¹⁾つまり、師範学校は中学校からみて劣位に置かれていたが、師範学校の高度化はかなりの期間求められ続けてきたといえよう。

また、こうした制度変更の背景には、さらなる理由があった。師範学校には原則として高等小学校卒業者が入学してきたが、すでに1907年には中学校卒業者が師範学校に途中から入学できるようになっていた。このことは両学校における教授内容について一つの問題を投げかけた。横畑は、1942年頃に中学校から師範学校に入った者が師範学校は中学校と同じ内容を繰り返しているからつまらないという証言をとりあげ、師範学校と中学校の教授内容がほぼ同じであったことを指摘している。⁴²⁾この言説が意味するところは、師範学校と中学校の教授内容は同程度であったことを示唆している。政府はこうした問題を解決するためにも、

中学校の上に師範学校を置き、師範学校の教授内容を高度化する道を選択した。このことは、上記に挙げた1931年の師範学校規程改正と1943年師範教育令中改正の内容に合致していると言えよう。

実際、今回の研究でも、明治後期、つまり1907年頃は中学校用の教科書のほうが師範学校用のものよりも頁数が多く、詳細な内容であった。しかしながら、昭和初期、つまり1937年頃には日本地理・外国地理・地理学通論の地理科教科書においては、師範学校と中学校の地理科教科書の内容はほぼ同一なものまたは師範学校教科書のほうが詳細なものになっていた。頁数は内容の水準を反映していると考えられるため、次第に師範学校の地理科のレベルは高度化していったことを示している。つまり、明治後期から昭和初期にかけて、師範学校の教授内容が高度になっていったことにはこうした教育制度の変化があったからではないだろうか。

また、師範学校が中学校よりも上位におかれた時期の地理科教科書にもその傾向は表れている。つまり、戦前の教育システムが形式上残っていた1946年に発行され師範学校で用いられた『暫定師範地理』⁴³⁾は、それまでの中学校や師範学校の地理科教科書よりもかなり高度な内容になっている。紙幅の関係で、本研究ではこの教科書について検討せず今後の課題としたいが、専門学校程度に格上げされた師範学校が目指した地理教授の内容は中学校の水準を越えているのである。この『暫定師範地理』の高度な内容は、師範学校が名実ともに中学校の上位に位置する学校となったことを示すものといえる。

こうしたことから、師範学校の地理科教科書がしだいにその水準をあげ、中学校のものと同じ内容になり、中学校の内容をこえていった事実は、当時の師範学校制度変遷の反映であると言えよう。

VI おわりに

明治後期と昭和初期における師範学校と中学校

の地理科教科書の具体的検証から、中学校教科書が常に師範学校教科書よりも頁数が多く、詳細な内容であったとは限らないということ、師範学校用教科書において、将来役立つであろうと考えられる地理教授法が掲載されることはほとんどなかったことが明らかになった。

明治の学制開始から中学校は学校制度において中等教育の中心的存在、いわゆるエリートコースであったことから、当初は中学校の教育制度がまっさきに改革され、その後で高等女学校や師範学校などの制度がかえられていった。しかし、教育制度を総合的に改革するという政府の考えから、後年は中学校、高等女学校、実業学校を全体としてとらえ改革されていった。

地理科教科書の内容についていえば、通常中学校用教科書の内容が他の学校種よりも詳細に書かれていた。このことはこれまで具体的に頁数や記述内容をみても明白であり、より高度な知識が中学校では求められていたことの証左といえよう。

しかしながら、昭和初期にはいると中学校が師範学校よりも高度な内容を扱っているとは必ずしもいえなくなる。頁数の面からも、師範学校のほうが中学校の教科書よりも量的に少ないとは必ずしもいえなくなり、中学校の優位性が認められなくなる。

この中学校教科書優位性の消失の原因は、師範学校自体が教育制度の中で高度化をもとめられていく中で、師範学校地理科教科書のレベルも上げられていったのではないかと推察される。

また、本研究の開始にあたり、師範学校の教科書は将来訓導となる者が使用する教科書であることから、教科書には地理の知識は当然のこと、地理教授法についても何らかの記載があるものと想定していた。師範教育においては、教科内容と教授法は重視されると考えられたからである。

しかしながら、師範学校の地理科教科書に教授法が書かれているものはほとんどなく、中学校と同じように地理の知識のみが書かれていた。

たしかに、師範学校の生徒たちには日本地理・外国地理・地理学通論以外の科目として地理教授法の時間があり、そこで教授法について学ぶため地理科の教科書に教授法を掲載する必要はないとする考えはあるだろう。しかしながら、わずかな数ではあるが、教授法を掲載したり、教育にかかわる法令を掲載したりした教科書があったということは、地理の知識と教授法を関連づけて学ぶことの大切さを認識していた執筆者がいたということである。

地理科の教科書に知識と教授方法が並んで記載されることは、単なる地理の知識の集積を暗記するのではなく、それらの知識をいかに子どもたちに伝えるかということを考えることにつながると思われるが、知識と教授法を関連させることはみることができなかった。

このように、地理科教科書において地理の知識と教授法を関連づける考え方やスタイルが一部の教科書でみられたわけだが、その具体的な内容について検証できなかったため、それについては今後の課題としたい。具体的には、地理教授法の授業の際に用いられていた書籍から、地理教授法の実態に迫り、それらを今日の地理教授法と比較することで、今日の地理教育にいかすことができる内容について導出することも重要な課題と言える。

（愛知教育大学・教育学部）

注

- 1) 近藤裕幸「師範学校と旧制中学校における地理教授制度の時期区分」地理学報告116号, 2014, 25-36頁。
- 2) K・ジョンストンの執筆に関わる経緯などについては現時点で不明である。
- 3) 三省堂編纂所『帝国新地理』三省堂, 1901, 1-2頁。
- 4) 地理学通論は、地文・地文学・地理学概論などと時代によって呼称や内容がかわった。
- 5) 本研究では、初版教科書のみを数え、再版以上については数えていない。
- 6) 高等女学校生徒は最も多いときで約60万人いた。
- 7) 外国地理教科書は時期によって上・下など2～3冊に分かれていたが、1冊として数えた。
- 8) 三省堂編輯所『師範教科 最近地理学 日本地誌』三省堂, 1909, 1頁。
- 9) 三省堂編輯所『中等教科 最近日本地理』三省堂,

- 1911, 1頁。
- 10) 前掲8) 83-84頁。
 - 11) 前掲9) 71-72頁。
 - 12) 六盟館編輯所『中等教科明治地理 日本篇』では、「本書は中学校の新教授要目に基づき、尋常小学地理を参考し、中等程度の諸学校に於ける、日本地理科の教材に充つる目的を以て、編纂したるものなり」とあり、六盟館編輯所『師範教科 明治地理 日本之部』(1909年初版; 師範学校用)では、「本書は師範学校第1学年に於ける地理教科用に充つべき目的を以て編纂したるものなり。目的、すでに前述の如しとせば、他の中等教育程度に於ける地理教科書と其の趣を異にすること、偶然にあらず。〔中略〕内容の程度稍高し。是れ、他の中等学校に比して、師範学校の程度稍高ければなり。従って紙数も亦稍多からざるを得ざりき」とある。
 - 13) 六盟館編輯所『師範教科 明治地理 日本之部』六盟館, 1910, 1頁。
 - 14) 六盟館編輯所『中等教科明治地理 日本之部』六盟館, 1909, 39頁。
 - 15) 「?」は教科書内で「何か」の意味で用いられている。
 - 16) 前掲13) 38頁。
 - 17) 前掲13) 39頁。
 - 18) 三省堂編輯所『中等教科 最近世界地理 上中下』三省堂, 1911, 1-2頁
 - 19) 六盟館編輯所『講習科用 明治地理 外国』六盟館, 1909, 2頁。
 - 20) 六盟館編輯所『中等教科 明治地理 外国之部 上中下』六盟館, 1912, 34頁。
 - 21) 三省堂編輯所『師範教科 最近地理学 地文及人文』三省堂, 1909, 1-3頁。
 - 22) 三省堂編輯所『中等教科 最近地理学』三省堂, 1910, 1-2頁。
 - 23) 六盟館編輯所『師範教科明治地理 地文及人文之部』は、『師範教科明治地理 第二学年用』と『師範教科明治地理 第三学年用』の合本であるため、1冊として取り上げる。
 - 24) 六盟館編輯所『師範教科明治地理 地文及人文之部』六盟館, 1910, 15-16頁。
 - 25) 六盟館編輯所『新体地文学』六盟館, 1909, 19-20頁。
 - 26) 前掲25) 20-21頁。
 - 27) 西田與四郎/山崎直方関『講習用書 地理篇』宝文館, 1907, 1-2頁。
 - 28) ドイツのヘルベルト (1776-1841) は教授法の段階を「明瞭・連合・系統・方法」とし体系化した。のちに弟子のツィラー (1817-82) は「明瞭」を「分析・総合」の二つにわけ、5段階に改良した。さらに、ライン (1847-1929) によってこれが「予備・提示・比較・総括・応用」の5段階に改良され、広く普及した。「予備」は今日の指導案でよくみられる導入に相当する。「提示」は新しい教材を示すことである。「比較」はこれまでの内容と新しく学んだ内容を関連づけることである。「総括」はこれまでに学んだことをまとめることである。「応用」は学んだことを具体的事実の当てはめて定着をはかることである。これまで暗記のみが教授法の中心であったものが、このヘルベルト・ツィラー・ラインらの教授法によって大きく改良され、世界の教育界に広まり、今日の教育においても大きな影響を及ぼしているといえる。(教育思想史学会『教育思想事典』勁草書房, 2000, 701-702頁より引用し、筆者が一部加筆した。)
 - 29) 守屋荒美雄『新令準拠新選地理 日本篇 中学校用』帝国書院, 1937, 276-286頁。
 - 30) 田中啓爾『中等新外国地理 改訂版』目黒書店, 1938, 1-2頁。
 - 31) 田中啓爾『師範新外国地理』目黒書店, 1937, 85頁。
 - 32) 前掲30) 4-5頁。
 - 33) 前掲31) 159-160頁。
 - 34) 前掲30) 128-129頁。
 - 35) 前掲30) 129-132頁。
 - 36) 守屋荒美雄『新選地理 外国篇 師範学校用』帝国書院, 1937, 1-2頁。守屋荒美雄『新令準拠新選地理 外国篇 中学校用』帝国書院, 1937, 1-2頁。
 - 37) 守屋荒美雄『新選地理 概説之部 師範学校用』帝国書院, 1934, 52-54頁。
 - 38) 守屋荒美雄『新選地理 地理通論』帝国書院, 1933, 11-12頁。
 - 39) 師範学校が中学校と比較して、劣位に置かれていたことについては、水原克敏「師範型問題発生の分析と考察」日本の教育史学第20集, 1977等に詳しく述べられている。
 - 40) 横畑知己「1943年『師範教育令』に関する一考察—師範学校昇格運動とその思想—」教育学研究54号, 1987, 262頁
 - 41) 田中耕三「師範学校における地理教育—昭和10年前後の大阪府立池田師範学校の場合—」地理学評論58-7, 1985, 440頁。
 - 42) 前掲40) 263頁。
 - 43) 文部省『暫定師範地理 本科用 二巻』文部省, 1946, 29頁。

Comparison of the Contents of Normal School and Middle School Geography Textbooks Used in Late Meiji and Early Showa Periods under the Old System

KONDO Hiroyuki

Faculty of Education, Aichi University of Education

The aim of this study was to verify the quantitative and qualitative characteristics of the normal school geography textbooks as compared to those used in middle schools.

The study examined geography textbooks from 1910 and 1937 and reached the following conclusions:

1. From inspection of the contents of geography textbooks used in normal school and middle school in the late Meiji and the early Showa periods, I found out that middle school textbooks were not always more voluminous and deeper than normal school textbooks. This fact suggests that the status of the normal schools improved only gradually. In other words, the growing sophistication of normal schools led to a relative decline in middle school textbook superiority, and raised the level of normal school textbooks.

2. In textbooks for normal schools, there were almost no geographical teaching methods presented that would be useful for teachers in the future. But there were some textbooks which contained teaching methods and decrees concerned with education.

One can say that there were authors who recognized the importance of relating teaching methods. This continues to be a problem in today's teacher education.

The present work failed to consider geographical teaching methods in detail and this should be examined in another paper.

Key words: textbook, teaching methods, normal school, middle school, old education system, prewar period